

2017年 年報巻頭言

白梅学園大学・短期大学 学長 汐見 稔幸

はじめに

本年報は22号になります。

短大だけしかなかった時代に、研究のための機関をあえてつくり、教員の研究を奨励してきたことは、画期的なことであったと思います。

ともすれば、保育者養成を中心とした養成校では、養成の仕事に忙殺され、自身が、研究者であることさえ忘れてしまうようなことが起こりがちです。また、短大という組織のあり方もそうした傾向を助長していたかもしれません。しかし本学はいえ本学の先輩教員たちは、そうした状況に陥ることをなんとしても防ぎたいと、今考えるとたいへん優れた努力をしました。

白梅は優れた保育者や勤め人を育てることに誇りをもつことはしてきたし、いまもしている。しかし長いスパンで見るとそれだけではだめだ。自覚的に研究を続けて行かないと、やがてその養成、育成の仕事もマンネリ化し、時代の要請から離れていってしまう。短大も大学である限り研究をし、成果を社会に還元していくことが本来のミッションではないか。その研究のテーマや方法のこだわりで白梅らしさがでてくるはずだ。そうした研究の成果が教育の仕事の水準を上げていくことにもつながるのではないか。だから、白梅に、教員の研究を奨励する組織をつくろう。予算もとってみんなの研究を励まそう。そう相談して、この教育・福祉研究センターをつくったのです。

以上はわたくしの勝手な想像ですが、あながち当たっていないわけでもないのではないかと思います。当時やスタッフの顔を思い浮かべながら、こんな議論をしたんだろうなと想像するとわたくしの方がニヤニヤしてきますし、改めて先輩たちの努力に敬服する想いが強くなってきます。

こんなことを書いたのは、このときからすでに20年以上たって、新しいスタッフが大部分になり、本学に教育福祉研究センターが存在していることの意義の認識が次第に不鮮明になってきているのではないかと懸念するからです。四大の比率が高まっていますので、研究を進めることへの自覚は当然高くなってはいますが、このセンターを大事にし、より時代にふさわしい組織へとバージョンアップしていくためのアイデアをみんなが提案するという点ではまだまだ課題があると思っています。

さしあたりはこの雑誌を充実させるということが課題ですが、あわせて本学の研究の機運の高めのための提案を本学スタッフの皆さんにお願いしたいと思います。

時代は教育、福祉ともに20世紀バージョンから21世紀バージョンへの転換を急いでいます。政策が先行している印象がありますが、研究はその先を進まねばなりません。私たちがしなければならない研究のテーマはまさに山積していると思います。本センターの役割はますます高まると思うのです。